韓国における角筆文献研究の現況と今後の課題

南豊鉉(檀国大学校名誉教授)

1．韓国における角筆資料の発掘

2000 年7月に韓国のソウルで小林芳規先生によって角筆資料が初めて発見されて以降、2006 年9月までに発見された角筆資料は、参考資料に添付したように全 69 種である。この資料は殆どが経典であるが、18 世紀後半の領相元仁孫の肖像画の下絵(資料番号 63)と、19 世紀の古文書である全羅道官案(資料番号 65)のみが例外である。この例外は、(発見された)量は少ないものの、韓国の角筆が書物だけでなく書画や古文書までの広範囲に使われていた事実を示す。

この 69 点の資料は、7 世紀末から 19 世紀末までにわたっており、古代から近代末までの約 1300 年間、角筆が使われたことを示している。資料の量は非常に乏しいが、これからこの分野の研究が活発になっていくにつれ、より多くの資料が発掘されると思われる。

この書物資料に含まれた角筆の内容は、1) 角筆線、2) 角筆落書画、3) 角筆節博士、4) 経典の内容の解釈等、様々である。角筆線はその意味が曖昧であり、本来その書物にあった誤筆との区別がつき難いので、具体的な機能が確認されない限り、角筆資料として研究の対象にはならない。節博士は仏経の読誦法を表したもので、梵唄と密接な関わりがある。この分野の専門家による研究が期待される。

なお、経典内容の解釈のための角筆は次のように分類される。

a)漢字の釈　b)漢字の音　c)句切線　d)圏点　e)校訂漢字

f)註示符　g)補入符　h)全巻角筆点吐釈読口訣(境界線等含め)

この中で a)~ g)は断片的・随意的に使われたもので、資料の量が不足している現在では体系的な研究は困難である。韓国語史分野の研究者たちが特に関心を持っているのは、h)の全巻に記された角筆点吐釈読口訣である。これは韓国語の古代語研究に新たな章を開けたと評価される発見である。今までの古代国語研究は口訣字をもって記されている字吐釈読口訣が重要な役割を担ってきたが、その資料が全6点に過ぎず、絶対量が少なかった。しかし、15 巻の角筆点吐釈読口訣が新しく発見されたことによって、古代国語研究分野の期待も高まり、またその記録様式が独特なこともあって、口訣研究の新しい世界が広がる結果をもたらした。

2．角筆点吐釈読口訣の研究

2000 年の角筆口訣の発見以来、現在まで進められた研究成果を簡単に紹介する。

角筆点吐研究の最初の段階はその資料を移点する作業であった。この作業は原本の角筆痕を紙に写すことで、約3年間の作業によって瑜伽師地論、華厳経、法華経など、2001 年までに発見された角筆点吐資料は全て移点された。

点吐口訣では漢字を四角形として把握した。これは当時の人たちが欄上や欄下、または行間に四角形の点図を画いて、校訂をしたり、解釈上の異論を記したりしたことからも分かる。この四角形の四辺を三等分した12位置と、その内面を三等分した9位置を合わせて、21位置を定め、これに四隅を足した25位置が懸吐の位置になる。その後、瑜伽師地論の点吐口訣ではこの25位置が更に変化し、より多くの位置の区分があったことが知られた。

〔※　以下、韓国語原稿2ページ、3ページ、4ページの付表を適宜参照されたい。〕

單点;	•			
雙點;	水平 ••	垂直 :	斜線方向 ⁚	逆斜線方向 ⁚
線;	水平 —	垂直 |	斜 線 /	逆 斜 線 \
눈섭;	오눈썹 ⁺	우눈썹 ⁺	아눈썹 |·	어눈썹 ·|
	斜線方向오눈썹 ⁺/	斜線方向우눈썹 /⁺	逆斜線方向아눈썹 \⁚	逆斜線方向어눈썹 ⁚\
ㄴ낌표;	水平左向 - —	水平右向 — -	垂直下向 !	垂直上向 ¦
	斜線下向 ⁺/	斜線上向 /⁺	逆斜線下向 \.	逆斜線上向 ⁚\

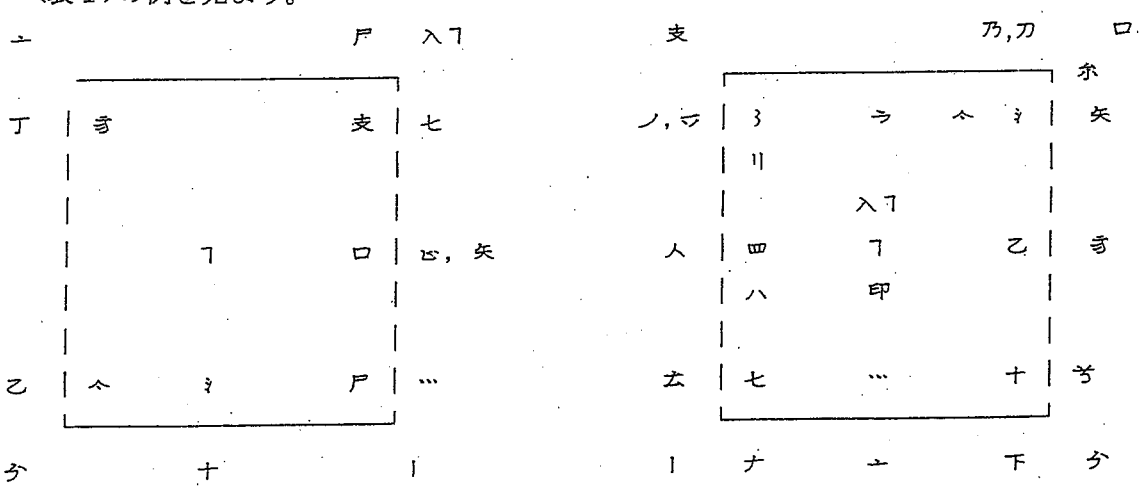
눈섭→眉毛

ㄴ낌표→エクスクラメーションマーク

上記の25種の点と線、そしてその結合形を漢字の25位置に配合すると、計算上では625種の点吐が使用できる。この符号はもっと多く作られるが、現在は25位置にこの25種の記号を全部使った点図は出ていない。また、文献によっても違いがあり、エクスクラメーションマークは瑜伽師地論では全く使われていない。

口訣字で記されている字吐釈読口訣では漢文の左右行間に吐を付し、逆読点を用いて語順を表し、字吐は韓国語で読まれる漢文の各構成素によって記した。しかし点吐釈読口訣では、韓国語の語順と同じ位置の漢文構成素は、この構成素に直接懸吐するが、語順が異なる際は、その句節の最後の構成素に合わせて懸吐する。こういう点で字吐釈読口訣と角筆点吐釈読口訣は異なる。晋本華厳経巻20のある句節の角筆点吐釈読口訣を例として説明する。

〈表1〉の例を見よう。



〈周本華厳經의 單点圖〉　〈瑜伽師地論의 單点圖〉

令一切衆生悉能除滅諸鄣導業

(2,16)

〈表1〉

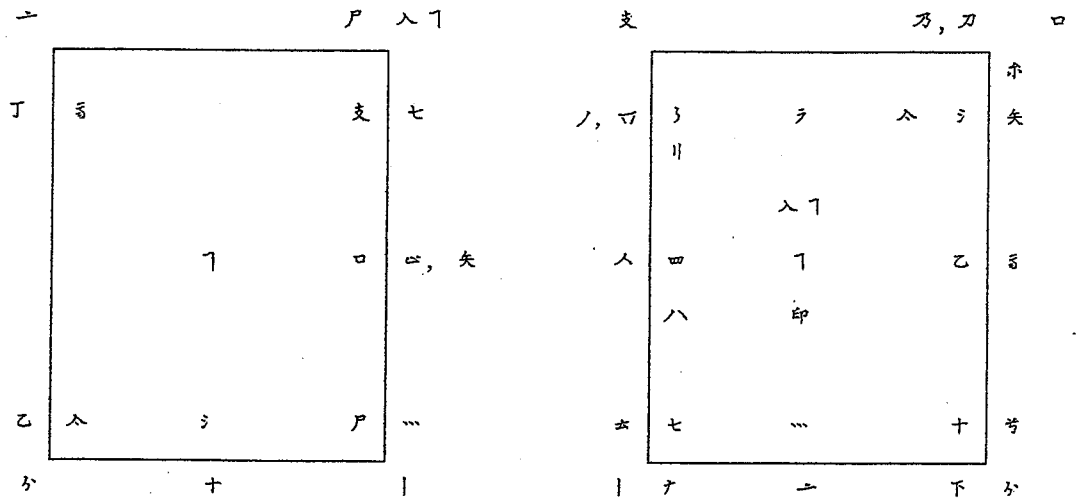
「生」の左辺中段外側の単点は対格助詞の「ㄹ/(ŭ)r」を表したものである。これは「一切衆生」がこの文脈では対格語で使われていることを意味するもので、この構成素は漢文の語順と韓国語の語順が同じで、「業」の字の後ろに三つの点土が集中されている。「能」の右辺上段内側の単点は「ㅊ /ti」を表しているが、これは「能」が副詞語として使われて、語順も韓国語の語順と同じである。その左辺中段外側の単点は前と同じく対格助詞を表したものである。右辺中段外側の逆斜線の下に点を打ったエクスクラメーションマークは、使役形の「ㅅㅣ/hʌi」を表したもので、本来漢文の「令」の機能に対応するものであるが、「令」は不読字として（読まないで、）この句の叙述語の「除滅」に続けて読んだものである。下辺左段外側の単点吐は「ㅁ/miŏ」を表したもので、句と句をつなぐ接続詞として使われている。この句節に字吐を付記し、当時の韓国語を考慮してハングルで記すと以下の通りである。

〈字 吐　表 記〉　一切 衆生ㄹ 悉　能ㅊ 諸　障碍業ㄹ 除滅ㅅㅣㅁ

〈ハングル表記〉　一切 衆生을 다아 能디 모ᄃᆞᆫ 障碍業을 除滅ᄒᆞ이며

各経典で使われた点吐を整理して点図を作ると、経典毎に 25 種の符号に合わせて 25 種の点図を作ることができる。しかし、単点を除けば他の符号の使用頻度は低い。説明の便宜上、現在までに把握された単点図を示すと〈表２〉のようである。

下の表は周本華厳経の総６巻に記された単点図と瑜伽師地論巻５、巻８に記された単点図を示したものである。周本華厳経の単点図は比較的単純で、瑜伽師地論の単点図は複雑である。これは用いられた符号が華厳経の方が複雑で、瑜伽師地論の方が単純であることと関係があるだろう。



〈周本華厳経の単点図〉　〈瑜伽師地論の単点図〉

〈表 2-1〉

<口訣字와 그 表音>

亠/iŏ	尸/l	入ㄱ/tʌn	支/ti	乃/na	刀/to
口/ko	丁/tiŏ	弓/čiŏi	七/s	丿/ho	勺/o
冫/a	彐/ʌi, ŭi	氵/Sʌ	宀/hʌi	ㄱ/(ʌ, ŭ)n	口/ko
匕, 矢/ti	人/koa	四/ra	八/k, ki	卩/in	乙/r
灬/io	土/kŏ	十/kʌi, kŭi	弓/hi	分/miŏ	丨/ta
冂/kiŏ	下/ha				

<表2-2>

<表２－１>で注目されることは、華厳経の点吐と瑜伽師地論の点吐が次の<表３>で見られるように、互いに対立の位置で使われているという事実である。

	<周本華厳經>	<瑜伽師地論>
分 /miŏ	下邊左段外側	下邊右段外側
丨 /ta	下邊右段外側	下邊左段外側
乙 /r	左邊下段外側	右邊中段內側
宀 /ra	左邊下段內側	上邊右段內側
氵 /sa	下邊中段內側	上邊右段內側
亠 /iŏ	上邊左隅	下邊中段外側

<表3>

この点図で互いに一致する位置で使われているのは中央の「ㄱ/n」である。この「ㄱ」の一致はこれらの点図が同じものから発生したことを証明するものではなかろうか。対称的対立は宗派と関係があると思われる。つまり、華厳経(宗)派と瑜伽師地論系の唯識宗(法相宗)派の対立的関係を示すものである。

角筆点吐口訣の写真が電算化され、2001 年１月から若い研究者たちによる共同研究が始まった。この研究会をもとに李丞宰が主導した共同研究の成果として、2005 年８月に『角筆口訣の解読と翻訳１』と『初雕大蔵経「瑜伽師地論」巻第五・巻第八の写真資料１』を発刊した。この本では李丞宰が点吐の 25 位置を数字で表記したものを応用した。下の<表４>のようにこれを利用すると、漢字の左辺下段外側にある単点は「41(・)」のように表記し、下辺中段内側の斜線は「43(/)」のように表記できる。この方法は、比較的簡潔に点吐を表記できるとともに、点吐口訣を電算化して表記することにも有用である。

11	12	13	14	15
21	22	23	24	25
31	32	33	34	35
41	42	43	44	45
51	52	53	54	55

<表4>

この方法を用いて瑜伽師地論巻５の初文の翻訳を表記すると次のようである。

Ａ：復次[23(･)]於色界中[22(･), 42(･)]初静廬地[44(･)]受生[33(/)]諸天即受[逆読線]彼地[42(･)]離生喜楽[34(･), 55(･)]

Ｂ：復次[ヲ]於色界中[ゝ, ヶ]初静廬地[十]受生[ソ丁]諸天即受彼地[ヶ]離生喜楽[乙, ゟ]

Ｃ：復次ヲ{於}色界中ゝヶ初静廬地十受生ソ丁諸天(丁)即彼地ヶ離生喜楽乙受ゟ

Ｄ：又次に色界中の初静廬地にて受生した全ての天は即ちその地の離生喜楽を受け、

Ｅ：次の形相世界の中で初静廬の地に生きを受けた天らは直ちにその場で欲心世界の受け喜びと楽しさ[離生喜楽]を感じ、

ここでＡ項は漢文原文に記入された点吐と符号を判読したものである。Ｂ項はＡ項の点吐だけを順序通り文字吐として移したものである。Ｃ項はＢ項の字吐釈読口訣を訳読した形で変えたものである。Ｄ項はこれを現代韓国語に逐字的に翻訳したもので、Ｅ項はこれに対する東国訳経院の翻訳をもって移したものである。こういう方法で2006年３月には『角筆口訣の解読と翻訳２(周本「華厳経」巻第三十六)』を瑜伽師地論と同じ方式で解読し、翻訳・刊行した。

以上が2006年現在までの角筆点吐釈読口訣研究の概略である。

４．今後の課題

韓国の角筆資料の中でも、点吐釈読口訣の発見は、韓国語史の研究に新しい章を開いてくれた重要な事件である。この角筆口訣の発見によってこの分野の新進研究者が輩出され、注目すべき研究業績が出たのも嬉しいことである。

しかし角筆資料の発掘に積極的な研究者はまだ多くはない。散発的に角筆口訣資料が発掘されているものの、角筆資料全般を対象にした調査者は未だに現われていない。これはこの分野の研究者が韓国語史の研究者に限られているからである。こういう点で、角筆資料全般を対象に資料を調査し研究する専門家が出るような契機を設けることも、これからの重要な課題であろう。

韓国は角筆資料の宝庫とも言える。７世紀後半から19世紀までの角筆資料が次々と現わ

れていることがこれを証明する。しかし上代に上るにつれ文献資料は希少であり、近代になるとその量が多くなるのは当然であるが、研究者たちは15世紀以前の資料にだけ関心を持ち、ハングル創制(1446 年)以降の資料をあまり研究していないのも事実である。口訣においても15世紀以降の資料は豊富であるが、これを整理する作業は散発的であり、体系化しようとする努力が足りない状況である。

現在韓国には15世紀以降の文献が多く残っているので、これからも角筆資料が多く発見されると思われる。この角筆資料は韓国だけでなく漢字文化圏、また世界の文化史において貴重な資産であるので、これからこれを収集・整理する研究者が現われなければならない。

角筆点吐釈読口訣は角筆資料の中でも集中的に研究が行われてきた分野である。それによってその解釈と翻訳集の刊行にまで至るようになった。しかし角筆点吐口訣は字吐釈読口訣に比べて年代が早いにも拘わらず、字吐口訣より古形の文法といえるのが未だ確認されていない。これは口訣の解釈と翻訳が字吐釈読口訣を中心に行われてきた上に、点吐の機能が把握されていないものが少なくないためである。これから、解読されなかった点吐を解読し、字吐釈読口訣より古形の文法を探し出す努力が要求される。

韓国の漢字音は15世紀以前の資料がないため研究が殆ど行われていない。高麗時代の角筆資料から声調と漢字音を表記したものが断片的に発見されてはいるが、これからこの分野の資料が蓄積され体系的な記述がなされることを期待する。

日韓両国の角筆資料には多くの共通点がある。これに関する研究も角筆研究の重要な課題である。これから韓国と日本で初期の資料がより多く発見され、相互の関係についての研究が盛んになることを期待する。